

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	ボリシェヴィズム研究における内容分析と精神分析の方法 (二・完) : N・ライツの研究を中心として
Sub Title	Content analysis and psychoanalysis in the studies of Bolshevism : with emphasis on N. Leites view (2)
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1959
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.32, No.9 (1959. 9) ,p.33- 54
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19590915-0033">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19590915-0033</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ボリシェヴィズム研究における

### 内容分析と精神分析の方法（二・完）

—N・ライツの研究を中心として—

奈 良 和 重

- 一 アメリカにおけるボリシェヴィズム研究の諸類型
- 二 ライツの『ボリシェヴィズムの研究』と内容分析の概念
- 三 内容分析の一例示……………以上前號
- 四 ボリシェヴィズムの精神分析的解釋……………以下本號
- 五 ライツの研究をめぐる問題點

#### 四

このようにして、ライツはボリシェヴィズムの内容分析をおこなつてゐるが、その内容データに對しては、さらに、精神分析理論に基づく推論<sup>（イシラーレンス）</sup>、ないしは解説があてはめられている。ここにおいては、ボリシェヴィキによつて表明された内容といふよりも、そのかくれた意味、つまり、ボリシェヴィキがどうしてかくかくの行動をとるのか、また、とらざるをえな

ボリシェヴィズム研究における内容分析と精神分析の方法

いのか、という内容の深奥にひそむ無意識的動機が問題とされているわけである。もちろんライツは、データ全部にそういつた解釋をくだしているのではなく、右の例證などは、とりたてて、精神分析的であるという必要もない。だがところどころに、彼の獨創性に満ちた解釋が見受けられる。内容分析におけるデータ解釋にはいろいろと問題が多いようであるが、つぎに、ライツの精神分析的解釋の應用を、いくつか記しておきたいと思う。

「ここに一つの政治的法則がある。いやあるいは自然の法則であるかもしない——お互に近接した二人の強力な隣人は、たとえどんなに親密であつても、ついには相手を倒そうという希望をいだくようになり、おそかれ早かれ、この希望を實行するにいたるという、すなわちこれである。(この強い隣人同志の法則については、われわれロシア人はもう少し考へてもよからうと思う<sup>(1)</sup>)。ドストエーフスキイの慧眼はこのように見抜く。そして、ボリシェヴィキ自身は、まさにそのように政治の本質を定式化しているのである。すなわち、「問題は、だれがだれを追放するか、あるいはだれがだれを解散するかにある」(レーニン)。「われわれは、『だれがだれを』というレーニンの定式にしたがつてゐる。われわれが、彼ら資本家をうちたおし、レーニンが言いあらわしたように、最後の決戦をさせるか、それとも彼らがわれわれをうちたおすかである」(スターリン)。

この『だれがだれを』という政治的關係こそ、いつまでも、黨と外部世界とのあいだにあるアリスティックな問題である。ライツのいうように、「『だれがだれを?』という問題が、世界共産主義の統合によつて決定されない——そしてそれは、そうならなくては決定されえないのだが——限り、世界は、根本的に、高度の緊張狀態におかれている。もし黨が、このことを忘れるとして、それは緊張が減少されるのではなく、將來の鬭争過程において、自己自身の破滅を確實なものにしてしまうだけである。ボリシェヴィキにとつては、高度の緊張狀態こそ政治のノーマルな狀態である。彼らはそれを、どうにもやつていけないものとして體験するのではなく、むしろ、かならず耐えてゆけるものとして體験する。西歐人のいわ

ゆる《眞の同意》なるものは、ボリシェヴィキにとつて考へることができないように思われる。……唯一の《眞の決定》は、競争者のいすれか一方が、まつたく破壊しつくされてしまうことによるのである。この最後の目的が達成される以前は、すべてのみせかけの《解決》は……相つぐ葛藤における武器にしかすぎない<sup>(4)</sup>」。

スター・リンが「……死滅しつつある階級の最後の殘存分子の反抗……彼らが死滅しつつあり、かつ最後をとげようとしていればこそ、彼らは一つの突撃形態から他のもつと鋭い突撃形態にうつる……」と述べてゐるよう、ブルジョワジーは、傷ついた野獸さながらに、ますます凶暴となり、破壊衝動に驅られてゆく。ブルジョワジーは《恥知らず》にも、すべての假面をぬぎすべて《自らの破滅を早めつつある露出症的症狀を呈して》いる。《たれがだれを》という關係において、ボリシェヴィキが恐れおののいているものは、表層的には、そういつた外部世界に對する危險、《現實不安》の體験であるには違いない。がしかし、それのみが、いやそれがほんとの彼らの恐怖の源泉なのであらうか。

一九〇七年、レーニンはつぎのよう書いてゐる。

わがプロレタリアートは、ロシアのブルジョワ革命から、ブルジョワジーに對する三重の憎惡と、ブルジョワシーとたたかう決意とを、ひきだすがよい。……わがプロレタリアートは、わが革命から、小ブルジョワ的な無氣力や動搖にたいする三重の侮蔑をひきだすがよい<sup>(5)</sup>。と。ここで注目すべきことは、ボリシェヴィキは、かえつて自らをその敵對者たるブルジョワジーと同一視してゐる、ということである。ブルジョワジーは憎惡すべき存在である。それは、ボリシエヴィキと同じように、憎むべき目的を追求しているからにほかならない。それに反して、小ブルジョワの態度はどうか。彼らは、敵のもちいる欺瞞にあざむかれ、敵に好意をよせたがり、無氣力な受身的態度をとりがちである。かくて、「……ボリシェヴィキがはつきりと認められた自己(權力を追求する自己)と相似てゐると信じてゐるのは、權力ある《ブルジョワジー》である。彼が自分の自己のうちに恐れている弱さを歸すべきものは、ほかならぬ無力な《小ブルジョワジー》に對してである<sup>(7)</sup>」。

このようにみると、ボリシェヴィキの恐怖の源泉は、むしろ自己自身もその分身にほかならぬロシアの人間、とりわけ、ロシア・インテリゲンツィアの諸性向のうちに見出せるといつてよい。ライツはいう、「……黨内の潜在的な敵たちに對する好感に屈従するということについての意識的恐怖は、黨外のひととや集團に對する同じような危険に屈服してしまうという無意識的恐怖と、ほぼ對應している」と。それ故、ボリシェヴィキの『意識』が、かくも強ければ強いほど、じつはその深底に、それと反対の衝動が隠されている、ということが推測される。ボリシェヴィキは、外部世界からの死にもの狂いの抵抗に直面させられているのみか、より根本的には、それ自身に内在するところの危険に脅かされているというわけである。「恐れられている潜在的攻撃者に對する言語上の敵對心の意識的根據は、意識下の防衛——外部的危険に對するよりもむしろ、内部的危険に對する防衛をおおい隠している」とみなされよう。

ドストエフスキイの『作家の日記』の一節にいうように、

悲劇的なロシア・インテリゲンツィアの特性は、ものに應じやすいことである。いつでも待つてましたとばかり賛成する癖である。……ロシアでれつきとした人間の大多數に君臨しているのは、譲歩しやすさ、譲歩と賛成の要求である……ロシア人は、自分で自分を誘惑し、阿諛し説得し、夢中になることが大好きなのだ。<sup>(10)</sup>

ボリシェヴィキが真向から反対するのは、まさにこうした譲歩的、妥協的態度である。黨は敵たちを憎悪するとともに、自らは憎惡の対象となるようでなければならないという。一九二七年、スターリンは、黨の一般方針の本質を論じて、つぎのように述べている。

この方針は正しいであろうか。

しかし、正しい。わが黨の一般方針が唯一の正しい方針であることは、事實がものがたつてゐる。

このことを證明しているものは、わが階級敵、すなわち資本家たちの出版物、法王とあらゆる種類の僧正たち、社會主義者およびアブラモーザイッヂやダンのような型の「ロシアの」メンシェヴィキが、さいきんわが黨の政策にたいして氣ちがいのようにはえだてていることである。資本家とその下僕たちは、わが黨を中傷している、——つまり、わが黨の一般方針は正しいのである。<sup>(11)</sup>

敵たちに好感を抱き、あるいは、彼らから好感を期待することは絶対に危険である。ボリシェヴィキは不屈さ(*unyieldingness*)を強調しつつ、かかる感情の侵略を防禦する。しかしライツは、いにしへのいきのよきの事実を読みとる。「屈従しがちな」<sup>(12)</sup>と對する反動形成(*reaction-formation*)の不安定さについての意識——その意識は、意識の下位において、部分的に、屈従しがちなことに對するボリシェヴィキの激しい攻撃を證明している」と。

ともかくも、ボリシェヴィキは、共産主義が完全に樹立されるに至るまでは、人間同志の愛というものは不可能であることを主張し、「敵の破壊性がまつたく合理的である」ということを肯定することによりて、……敵が友交的であると「いう無意識的期待、そう欲する要求を阻止しようとする」。<sup>(13)</sup>しかしながら、ロシア・インテリゲンツィアにしばしば見受けられる特徴は、およそ、その意圖とはかけ離れたものである。ボリシェヴィキがかくも人間のあいだの破滅的關係を強調することは、それ自體、「敵に對してより破滅的でないよう振舞い、敵に對して破滅的な意圖よりも、よりよしなにかを歸せしめようとする性向」<sup>(14)</sup>と鬪おうとするからにはかならない。ロシア・インテリゲンツィアは、人間同志が互いに抱擁しあうような奇蹟的變革を夢みる。ドストエフスキイの短篇小説『いやな話』の人物イヴァン・イリッヂは、

三段論法でいえば、自分は人道的である。したがつてまた信賴される。信賴されるから、したがつて信任をうける。信任を受けるから、したがつて、愛される。……いや……信任されるから、したがつて、改革そのものも、みんなに信用されるようになるのです。人は、いわば、……精神的にお互い同志抱擁し合い、すべての問題を友愛的に、根本的に解釋するでしよう。<sup>(15)</sup>という。この文章を、ボリシェヴィキ流にパラフレーズすると、つぎのようになろう。

自分は人間的である。したがつて憎まれている。憎まれているから、したがつて信任を受けない。人が信用してくれないなら、自分が持ち出そうとしている改革も信じてくれないだろう。人は、精神的にも、あるいはまた肉體的にも、お互いの同志（自分を）抱擁しあうよりか、むしろ、お互いの同志殺しあうだろう（もし人を殺さないと、自分が殺される）。すべての問題は敵對的に解決されるでしよう。<sup>(17)</sup>

ボリシェヴィキにとつては、人間同志、とくに男性同志が抱擁しあつてゐるようなイメージは、いやらしく恐しいものである。それこそ欺瞞のしであり、やがては屈辱的破滅の憂き目にあわされることになろう。こういう場合に、ボリシェヴィキが繰返しもぢる言語的表現は、彼らが敵たちと抱き合つて、接吻してゐる肉體的近接のイメージである。つまり、われわれの言つたとおりではないか！ パルヴス氏は……オスヴォジデニエ派の人間とめぐりあつて、抱きあうだろうと<sup>(18)</sup>。ベルンシュタイン主義者たちは、恥知らずにも、彼「ブレハーノフ」に投げキスをおくつて<sup>(19)</sup>いる。シャイデマンの一黨は、「自派の」人間としてカウツキーに接吻し、彼を抱擁している。<sup>(20)</sup>

といつた具合である。このようなデータから推測しうることは、ボリシェヴィキが、敵を殺すか、敵によつて殺されるかということを強調することは、實際に、人間を抱擁しよう、または抱擁されようという、恐怖をおわされ、罪意識をともなつた願望を阻止しようとする努力ではないのか、ということであり、「この假説は、……ひろくゆきわたつてゐるボリシェヴィキのある傾向、受身的であることの恐怖、コントロールされ利用されることの恐怖、攻撃に屈従したいという恐怖、の存在と一致す。ひとが、殺したいという自分の願望を肯定することにより、接吻したいという願望を否定すると、」このことは、多分、ボリシェヴィキが激しくもぢる投射の機制（mechanism of projection）によつて、敵のもつ殺人の願望に對する自己の信念を、「一層強化することになる」と、ライツは述べている。<sup>(21)</sup>

このことと關連して、ライツは、レーニンの生涯における親密な友人關係とその決裂に、「受身的同性愛（passive homo sexuality）の幻想」<sup>(22)</sup>と、それへの反撥という傾向を示唆してゐる。九〇年代には協力者であつたストルーヴェ、『イスクラ』

や『ツアルヴァ』誌における同僚であつたポトレソーフ、レーニンがその理論上の師と仰いでいたブレー・ハーノフ（ライツは、ambivalently loved master といつてゐる）、一九〇三年までは非常に緊密な間柄であつたマルトフ、それから、アレクサンスキー、マリノフスキイ、ジノヴィーエフ、カーメーネフ等々いずれも、レーニンは彼らとの睦まじさを絶交するや、イデオロギー上の裏切者として、非難した。一九〇五年十月に、彼はポトレソーフについて、次のようなノートを書きとめている。

……同志スタロヴェル「ポトレソーフ」は、あいかわらず新『イスクラ』の紙上で、彼が……舊『イスクラ』に參加して罪をおかしたことを懺悔している。同志スタロヴェルは、チエホフの短篇小説『可愛い女』の女主人公に非常によく似ている。可愛い女は最初劇團主といつしょにくらしており、こう言つたものである。私とヴァニチカは、まじめな戯曲を上演しています、と。つきに彼女は木材商といつしょにくらし、こう言つたものである。私とヴァシチカは、木材の關稅が高いのに憤慨しています、と。最後に彼女は獸醫といつしょにくらし、こう言つたものである。私はコリチカといつしょに馬の病氣をなおしています、と。同志スタロヴェルもそのとおりである。「私とレーニンは」マルトイノフを罵倒した。「私とマルトイノフは」レーニンを罵倒している、と。愛すべき社會民主黨の可愛い女よ！ あすはお前はだれの腕にだかれているだらうか？<sup>(23)</sup>

もうひとつ、ボリシェヴィキが、黨そのものにおける危険と誘惑に對するカウンター・パートとして、黨の目標定位すべてのエネルギーを充填せしめようとする努力を、ロシア・インテリゲンツィアに特有な死、觀念、というものからみた解釋を示しておくと、次のとくである。「ボリシェヴィキが手段を強調することの底には、なにも努力するあてもないままに、生そのものを目的として生きねばならない生活にゆだねられてしまうことの恐怖」というものがある。かかる期待は、ぼんやりとした不安や罪を惹きおこすように思われる。そこで生は満足にみたされて、やがては即時の死へと導かれる。このことは、トルストイの『クロイツェル・ソナタ』にあらわされている」という。すなわち、そのなかで、語り手とボズドヌイシ

エフとの會話のある箇處に、人類が存續できなくならうとも、一切の肉の愛、情欲を絶滅しなければならず、所詮、人間は生きている必要などなくなるという意見がかわされている。<sup>(25)</sup> これに對して、ボリシェヴィキの死に對する態度は、一九二一年、ラファルグ夫妻の自殺を知つたとき、レーニンは「彼らは年老いて鬭争に必要な力がつきた」のだと慨歎し、「黨のためにそれ以上働けなくなつたら、眞理を直視してラファルグ夫妻のように死ぬことができなければならぬ」といつたといふ、クループスカヤ夫人の回想の言葉に、明瞭に察知されるのである。

ボリシェヴィキは、なによりも先ず、仕事への生きがいを感じしめるように、そして現在の生を生きるというのではなく、自己を犠牲にしての黨へ獻身を強調してやまない。生活——彼らにとつて、政治こそ個人を全體的に包絡すること (total involvement) である——とは、犠牲であり、犠牲とは將來の喜悅を確保するための手段である。したがつて、「獻身的な黨員にとつては、彼の生活は、隅々まで全體として、疑いなく有意味である。かくて彼は、ロシア・インテリゲンツィアのあいだで、しばしば感じられ、非常に恐れられている憂うつな生活體験、つまり、すべての物ごと、そしてとくに、日々の活動 (全體をかたちづくらぬ數知れぬ断片) の、わけも分らぬ空しさや取りとめなさの體験を避けることができるのである。より詳しくいふと、黨への獻身は、インテリゲンツィアにきわだつてみられるような感情、破壊的な力としての死にうちひしがれるという危惧の念、ならびに、破滅としての死に對する信念によつて呼びおこされる取りとめなさの感覺、そういうものをお阻止してくれる不死の感情を誘うのである。……黨と共産主義のみが本質的なものであるという主張は、ロシア文學に頻繁に、しかも強度にあらわされている感情——いつでも、死というものが唯一の現實であるという感情を阻止している。<sup>(26)</sup>

黨への獻身は、意識の要求する自己否定的同調性を強化する。それはさらに、あらゆる感情の抑壓 (repression) ——スターリン主義的な黨の「一枚岩的」性格の intra-psychic counterpart ——を強制し、〈個人的〉動機の壓力が黨に侵略していくことを防衛する。……全世界のプロレタリアートを、ちつぽけな、日常の、些末な任務の水準以上にたかめようとして、<sup>(27)</sup>

またたかめた、革命的思想の巨人たち「マルクスとエンゲルス」……」の壯大で歴史的に價値ある眞實、その偉大なる仕事を犠牲をかえりみず、課題を遂行することは、やはり、ロシア・インテリゲンツィアが恐れているエゴイズムという罪を陰蔽してくれる。「黨への獻身は、『エゴイスト』であるという罪意識に對する防衛、すなわち、こうした危險に對する反動形成として、また、ひとがひきおこしてしまつたと感ずる損害に對しての補償として、役立ちうるであろう」。共産主義という映像、それはエゴイズムの廢棄であり、結局は、『各人の要求に應じて、各人へ』という原理をもつて、『だれがだれを』という關係を廢棄しようとするものである。<sup>(33)</sup> レーニンはいう。

狹義の、嚴密な意味では、共産主義的労働とは、社會のための無償労働であり、ある特定の義務をはたすためにではなく、ある特定の生産物に對する權利を得るためにではなく……報酬をめあてにしない、……公共の利益のために働かねばならないということを自覺した（そして習慣となつた）態度にもとづく労働のことであり、健康な身體の欲求としての勞働のことである。<sup>(34)</sup>

また、青年同盟の任務に關して、

古い社會は、自分がほかのものからうばうか、それともほかのものが自分からうばうか、自分がほかのもののために働くか、それともほかのものが自分のために働くか、奴隸所有者となるか、それとも奴隸となるかという原則のうえにうちたてられていた。だから、この社會でそだつた人々が……自分の取分にしか心をつかわず、他人のことなど知つたことではないとする人間……の心理、習慣、觀念を取りいれるのは當然である。……

青年同盟員であるということは、自分の活動、自分の力を共同の事業にささげるよう仕事をすすめることである。これこそ、共産主義的教育である。このように活動を通じてこそはじめて、青年男女は眞の共産主義者に變るのである。<sup>(35)</sup>

いまやあきらかなように、ライツの解釋においては、ボリシェヴィキ的性格とは、それ以前のロシア・インテリゲンツィアとの對立葛藤、それに對する自己防衛として、たちあらわれているものとされている。それはあたかも、個人のパーソナリ

ティ領域における自我とイドとの關係とバラレルである。自我が、いろいろの防衛機制(defense-mechanism)によつて、本能的衝動を抑壓したり、その對立物に集中化する反動形成をつくりあげたりして、自らの安全を保つてゆくのと同じように、ボリシェヴィキという自我は、ロシア・インテリゲンツィア、オブローモフの人間によつて、たえず危險や不安にさらされたり、その緊迫した狀態を、否定したり、あるいは、外部に投射したりして、防衛的手段を講ぜざるをえない、というわけである。さらに、ボリシェヴィキ的性格には、彼らがその支配を受けざるをえず、また喜んでその支配を受けようとむしている、超自我——ライツはそれと明確な表現をあたえてはいないが——も存在する。「威壓的に強い、冷靜に懲罰を加えるインペーナルな代理者の命令——『歴史』、『現實』、『事實』、『戰略』、『政治』、『革命』<sup>(36)</sup>」といったものがそれであろう。

- (1) ドストエーフスキイ『作家の日記』ドストエーフスキイ全集第十四卷二五一頁。
  - (2) レーニン「カデットの勝利と労働者黨の任務」(一九〇六年三月二十四日—二十八日) レーニン全集第十卷一一一頁。
  - (3) スターリン「ソ同盟共産黨(ボ)内の右翼的偏向について」(一九二九年四月) スターリン全集第十二卷五三頁。
  - (4) Nathan Leites, *The Study of Bolshevism*, p. 29.
  - (5) スターリン「ソ同盟共産黨中央委員會・中央統制委員會合同總會での演説」(一九三三年一月七日—十一日) 全集第十三卷一一三四—一三五頁。
  - (6) メーリハ「政治家の覺え書」(一九〇七年八月二十七日) 全集第十三卷六五—六六頁。
  - (7) Leites, *op. cit.*, p. 379.
  - (8) Ibid., p. 421.
  - (9) Ibid., p. 38.
  - (10) ドストエーフスキイ『作家の日記』、全集第十六卷一〇七頁。
  - (11) スターリン「ソ同盟共産黨(ボ)第十六回大會にたいする中央委員會の政治報告」(一九三〇年六月二十七日) 全集第十二卷三六五頁。
  - (12) Leites, *op. cit.*, p. 418.
- ライツは、屈從ぐせに對する反動形成の不安定さを示す例として、ゴーゴリ『死せる魂』のつぎの一節をあげてゐる。「このプロンドは、何よりも頑迷を特長とする人々の一人であつた。こういう連中は、口を開けばもう口論をはじめようとするし、自説に明らかに反対

なことには断じて同意せず、馬鹿を利口と言いもせず、ことに他人の笛で踊るなどということは決して承知しない組なのだが、結局は、いつもその特長の弱點が暴露して、拒否したことによって賛成し、馬鹿をも利口と言い、他人の笛で結構上手に踊ってしまう……」（全集第111卷九一頁）。

(13) Leites, *op. cit.*, p. 416.

(14) しかしながら他方で、ボリシェヴィキは、ロシア的性格にしばしばあらわれる無暗な暴力の行使にも反対する。その典型的な例は、ドストエーフスキイの『惡靈』におけるスタヴローゲンの行動である（全集第九卷三九頁参照）。また他方で、全面的な破壊衝動にも反対する。ライツの引用例によれば、『カラマゾフの兄弟』において、リーザがアリヨーシアに語つていて「どこにも何一つないようにしてしまいたいからよ。ああ何もかもなくなつたらどんなに嬉しいことでしよう」というような態度である（全集第十三卷一八三頁）。あるいは、ドストエーフスキイがロシア人全體の特性として指摘している「あらゆることにおいて一切の尺度を忘却してしまうこと……」これは極限を超えるとする要求であり、戦慄の要求である。深淵に近よつて半身をその端に乗り出し、深淵の底を覗きこもうとする要求で、時としては、といつても、かなりはげしく見られる現象であるが、その中へ氣ちがいのよう眞逆さまに飛び込もうとする要求』（作家の日記』I、全集第十四卷三八頁）、こういつた自己破壊的衝動にも反対である。その代表的な例は、『惡靈』におけるキリーロフの自殺への意志である（全集第十卷一七八頁参照）。

(15) Leites, *op. cit.*, p. 401.

(16) ドストエーフスキイ『いやな話』全集第二卷三三七頁。

(17) Leites, *op. cit.*, p. 402.

(18) ハーリハ「地主の國會ボイコット論」（一九〇五年十月十日）全集第九卷三四三頁。

(19) ハーリハ「カデットのプロックにハンド」（一九〇六年十一月二十三日）全集第十一卷三一一一頁。

(20) ハーリハ「アルショワジーは背教者たちをどう利用しているか」（一九一九年九月）全集第三十卷一一一頁。

(21) Leites, *op. cit.*, pp. 403-404.

(22) Ibid., p. 236.

(23) ハーリハ「社會民主黨の可愛い女」（一九〇五年十月）全集第九卷四四二頁。

(24) Leites, *op. cit.*, p. 100.

(25) ライツの引用箇所についてでは、トルストイ『クロイツェル・ソナタ』中村白葉譯（角川文庫）四三一五一页参照。

(26) クループスカヤ『レーニンの思ひ出』下巻七頁。

(27) Leites, op. cit., pp. 136-137.

(28) Ibid., p. 187.

(29) Ibid., p. 193.

(30) レーニン『J.・F.・ペッカー、J.・ディーヴィゲン、F.・エンゲルス、K.・マルクスその他からF.・A.・ゾルゲその他への手紙』のロシア語譜序文』(一九〇七年四月六日)全集第十二卷三八一頁。

(31) ボリシェヴィキは、自由とか人格を尊重する、いわゆる個人主義的傾向に反対する。それは、たとえば、ベリンスキイのつぎの表現にみられるとき立場である。「……主體、個人、人格の運命は全世界の運命より重大である。……かりに私が發展の梯子の絶頂に昇ることを許されたとしても、その絶頂でさえ私は、偶然や、迷信や、フィリップ二世の宗教裁判等々のあらゆる犠牲に對して納得の行く説明を求めるやうだ。わおなければ、むしろその絶頂から、眞逆様に墜落した方がよい……」(Nicolas Berdyaev, 'The Russian Idea, New York, Macmillan, 1948. 田口貞夫譯「ロシア思想史」[創文社刊、一九五八年]九一頁)。

(32) Leites, op. cit., p. 139.

(33) Ibid., p. 140 and p. 438.

(34) レーニン「古來の制度の破壊から新しい制度の創造へ」(一九〇二年四月八日)全集第三十卷五三八頁。

(35) レーニン「青年同盟の任務(ロシア青年共産同盟第三回全ロシア大會での演説)」(一九二〇年十月二日)全集第三十一卷二九一頁、一九五頁。

(36) Leites, op. cit., p. 484.

## H

かくて、ライツのボリシェヴィズムに對する考え方は、その基底において、ボリシェヴィキの政治的態度、なからんずく、そのヒリート獨自の行動の基準枠に、すべてが還元され、そこから彼らのいわゆるストラテジー——ライツはこれをオペレーショナル・コードと呼ぶ——が派生する、ということである。先に列舉したカテゴリーにしても、それらがボリシェヴィ

キのパーソナリティ・レヴェルでの行動規制が多く依據しているということは明白である。世界のラディカルな变革を目指しつつあるボリシェヴィキにとつては、社會主義とか共産主義とかいう曖昧なタームで示される制度上の變化が、人間自身をも變化せしめると信じられ、その究極的價値目標は餘りにも自明なものとされている。ボリシェヴィキ黨は、まつたく《意識的》な政治組織體であつて、進行しつつある歴史的過程（今世紀にあつては、資本主義から社會主義への移行ということ）における、さまざまの好機を利用し、それらを現實へ轉化させようとしている。共産主義の世界的規模における勝利、ボリシエヴィキのオペティミスティックな信念は、きわめて確固たるものである。しかしその反面、《だれがだれを》破壊するかという危險に對して、彼らほど敏感な神經をもつたものもない。彼らは絶えず鬭争し、攻撃し、防禦しなければならない。すなわち、大衆の《自然成長性》に對しては意識をもつて、革命のロマン的感傷に對しては權力の極限的擴大をもつて、曖昧さと饒舌に對しては嚴密さをもつて、情動や悲哀に對しては制御と堅固さをもつて、動搖や教條的頑迷さに對しては忍耐と柔軟性をもつて、無抵抗に對しては突き進んでゆく行動力をもつて、散漫さに對しては力の集中をもつて、しなければならない。かくて黨は、危險を間近に控えて、あるときは退却を容認しつつ、前進に前進を重ねなくてはならないのである。

こういつたボリシェヴィキのオペレーションル・コードは、ライツの指摘するように、彼らの心的態度から生じているし、それは實際、「行動に關連づけられた體系<sup>(1)</sup>」として把握されるべきものである。たしかに、ボリシエヴィズムというイデオロギーは、本源的なマルクス主義理論の照明によつて説明されるべきものであらうけれども、むしろその行動化したイデオロギーの側面には、彼らのパーソナリティが大きく影響している。したがつて、ライツが「わたくしは、わたくしが記述しようとするオペレーションル・コードが、ボリシェヴィキ・エリートによつて採用されるようになつた、また、コード自體が受けた諸變化を生ぜしめるにいたつた條件の複合を、體系的にあきらかにしようと試みない。かくて、わたくしは、このコードのさまざまな要素にみられるイデオロギー上の由來（ideological derivation）には、關心をもたない」（傍點筆者）とい

う見解をとつてゐるのも肯定されよう。

がしかし、このことが同時に、ライツのボリシェヴィズム研究のもつ長所であるとともに、彼の採用する方法そのものに歸因する缺陷もあるということを、指摘しておかねばならない。ボリシェヴィキの行動は、それがいかにパーソナルな動機づけによるものとみえても、イデオロギー化された關節點を切斷してしまつては、その固有な特徴を見失なつてしまふことにならうからである。彼らの行動のレヴェルだけをみると、それは、レーニンのパーソナリティ特性と相關關係あり、事實、彼を中心とする黨の役割が、ボリシェヴィキの歴史的形成の場で、壓倒的な比重を占めていることは疑いない。しかしながら、A・マイヤが指摘しているように、「このコードのマキアヴェリ的原理は、基本的には、教義よりもパーソナリティによつて、はるかに多く決定づけられている。……この理由からして、ライツ教授が、オペレーショナル・コードを論ずるにあたり、精神分析的シンボルをもちいていることは正當化されるのである。しかしながら、このコードを、より廣いマルクス主義的傳統、課題、教義との關係においてみてみると、有益である。レーニン主義は、心的狀態として取扱うこともできるが、それと同等の正當な根據をもつて、體系的政治理論として取扱うことができる。……これら二つの觀點は、相互に補足しあわねばならない。なぜなら、理論的側面と心理的側面とは相互依存的であるからである」<sup>(4)</sup> といふことは、當然のことと思われる。

ついでに、ライツの精神分析的解釋について觸れてみる。ベルはつぎのように批判している。「ひとはたずねるであろう、どんな意味で、ひとつの思想の背後にある原初的衝動が思想そのものよりも『現實的』であるのか、と。これは、精神分析的思考に關連してたびたび出會わされる困難である。思想の背後にある心理的衝動というものが、思想のもつ眞實をテストするものではないことは、明瞭である。眞實についてのテストは、思想が發生した後に、おこつてくるものである。ところがわれわれは、隠された主要動機をあざ笑う勿れ、とおしえられる。というのは、われわれは思想を扱つてゐるのではない

く、思想がささえられ、もちいられる方法を扱つて、いるからである、と。ライツの論ずるところでは、どんな見解でも、屈強さ、誇張、强度をもつてささえられているもの——共産主義のすべての見解がそうであるが——、そして、合理的テストをすべて激しく拒絶するものは、それが、思想に矛盾する強い無意識的願望と恐怖に對する防衛をかたちづくつて、いるものだ、という假定を提起する、というのである。軍人になるというように、歴然たる男性らしい職業に從事することが、そのひとに對して、《潜在的同性愛》というレッテルを貼りつけるものではない。彼が、強迫的に、猛々しく、理性を超えて、自らの軍人的態度を主張するのをみいだすとしても、われわれは、《常識》でもつて、彼はそのように裝うて、いるよりか男性らしくないことを恐れているのだ、と疑ぐつてみることができる」<sup>(5)</sup>。

ボリシェヴィキ的性格には、精神分析でいう《強迫的性格》(compulsive character) というものを窺うことができ、事實、それと似かよつた部分も大いに含まれて、いる。<sup>(6)</sup> 前節でみたように、ボリシェヴィキの行動の背後には、無意識的衝動がたたえられ、それに對する強迫的な意識の誇張化といつた現象が認められよう。しかし、前述したように、ライツの解釋は、ボリシェヴィキのイデオロギーや社會構造を無視したまま、フロイド理論の適應であるというように見受けられる。ボリシェヴィキの《意識》は、無意識のたんなる合理化であるとか、あるいはさらには、それ自體がいわば虚偽の意識にすぎないというように受けとられないであろうか。ややもすると、ライツの解釋には、そういう誤解を生む原因が内在している。

すでに本稿のはじめの方で、ライツの研究においては、ボリシェヴィズムの構成と精神分析理論とは直接關連を有しないことを述べておいたが、彼にあつては、内容分析そのものが、精神分析と不可分に結びついている。ライツが、ボリシェヴィキの言語的シンボルの裏に廻つて、その深い底流をあかるみにだそうとした努力は、われわれの氣付かない心理的側面を解明した點で、それが成功しているかどうかは別とし、すこぶる重要な意義をもつて、いる。しかしながらまた、「ライツの

いうように、ボリシェヴィキ的性格の源泉は、十九世紀におけるロシア・インテリゲンツィアの極端な氣質に對する反<sup>アカシヨン</sup>動のうちに横たわっているということは、まだフロイドの助けを借りなくても、歴史を書けることだ。つまり、レーニンとの協力者は、ロシア的性格の傳統のパターンを逆轉しよう、カラターエフやオブローモフを克服しようとする試みに、まったく意識的であつた、と。ところが、ボリシェヴィキ的性格を無意識的な、壓倒的に強力な願望に對する『反動形成』として、ライツが語るとき、彼は精神分析以前には不可能であつた方法で、政治にアプローチしている」といわれるのももつともである。ライツはわざわざ手のこんだ精神分析理論をもちいている、という印象を與えるところも、けして少なくないからである。

つぎに、内容分析についてみると、先ず、ライツはしばしば、黨のリーダーシップの變化とか世界政治の諸要因に附加的に言及してはいるが、そのような状況とのコンテクストにおいて、ボリシェヴィキはダイナミックに反應しているとはいっても、それにもかかわらず、つねに一定の行動のパターンがある、と考えられているのである。すなわち、一九〇三年から一九五二年までのあいだの彼らの行動の連續性<sup>コンティティ</sup>を前提としつつ、その政治的シンボルや言語的記錄のユニフォーミティを内容分析しているわけである。この場合、ライツの内容分析に關する限りであるが、そういうた素材の扱い方が技術的に餘り明確にされていない。ボリシェヴィキの言語的表現、ないし内容のユニフォーミティは、その時に應じて、まつたく多様な含みをもつており、ましてや彼らの事實上の行動のユニフォーミティが、それから期待できるものではない。「……すべての政治的言語表現の分析における基本的問題は、政治家が自己の確信からものをいうことと、たんに効果を狙つていうこととに區別を設けることである。……ソヴェトの sacred texts の分析にも、このような困難な問題、根本的な戰術をあらわしている言明と區別して、戰略的目的や効果のためにいわれたものを決定するという問題が含まれている」。この點は、ボリシェヴィキの言語的記録を内容分析するに當つて、いかに慎重であつてもありすぎることはないであろう。

右と關連したことであるが、ボリシェヴィキの行動とロシア的人間との關係についてはどうか。ライツはこれを、連續性としてよりもむしろ、<sup>ライツ</sup>非連續性<sup>（ライツ）</sup>として把えているが、ボリシェヴィキの行動を理解するのに、ロシア文學との關連づけが必要である——ライツの説明は、あたかもそれがいわば *sine qua non* であると主張しているようであるか——というのはなぜか。彼の内容分析におけるロシア文學の素材の取扱いについて、だれでもが差し挿みたくなる疑問とは、單純なものである。すなわち、「ロシア古典文學の責めさいなまれた、傷ましい人物、レオ・トルストイの『クロイツォル・ソナタ』におけるポズドヌイシェフ、ドストエーヴスキイの『罪と罰』におけるラスコールニコフ、あるいは、チエーホフの『櫻の園』の諸人物のごときは、ロシア的な行動や態度に、多くの光を投げかけているのか」と、いうことである。すでにみたように、レーニン、スターリンの言葉のうちにも、ロシア文學上の代表的人物がたびたび引き合いにだされていた。そしてそれらは、もはや文學的な代名詞ではなくて、實質的な意味をもつ政治的、比喩である、ということは想像に難くない。だがそれでも、ロシア・インテリゲンツィアの反動形成（といつても、精神分析的な意味においてではなく）としてのボリシェヴィキという假説は、ロシア文學という素材と彼らの言葉との *juxtaposition* によつて證據づけられるものではない。さらに、そのことによつて、ソヴェトの現實を指示しているという結論に達するには、より確<sup>（確）</sup>實<sup>（實）</sup>なデータが得られなければならぬことはいうまでもない。

ところが幸いにして、われわれは、E・J・シモンズ等の實證的研究によつて、ライツの假説が、ある程度、確證されることを知らされている。周知のように、現代ソヴェトにおいては、作家には、藝術の自由はまつたく拒絕されており、彼の創造的精神といふものは、黨によつて命ぜられた思想、信念、忠誠心の一定の型に制約されてしまつてゐる。したがつて、「今日のソヴェト文學は、ただの平均的な男女を描くことを誇りとしているが、それも、理想化された肯定的な主人公や女主人公の公式的イメージにあてはめられている」。<sup>(11)</sup>黨のコントロールは、あきらかに、文學に反映しており、「ソ同盟における

る過去三十五年間の文學に對するコントロールの歴史は、黨の歴史と密接に結びついて<sup>(12)</sup>いるといえる。にもかかわらず他方で、シモンズによると、「ソヴェト文學のかなり多くの内容に、『ブルジョワ的殘存』のテーマが依然として存在していることは、それらを排除しようとして、黨が向けてきた三十七年間の努力の後にも、それが宣傳的成功ほどにかんばしくない、ということを示唆している。ソヴェトの國外追放者——そのほとんどがもと作家であつた——のかなりのサンプルにおいて、筆者がおこなつた、文學のコントロールに關するインターイユと質問法の研究のうちには、小説や演劇に示されたソヴェトの現實に對する忠誠はどうであるか、また、讀者によつてそれがどの程度受けいれられているか、という質問に對する答えが含まれていた。その結果は、すべての點で結論に達したわけではないが、ソヴェトの讀者は、小説や演劇の肯定的な主人公や女主人公を非現實的であるとして拒否し、いわゆる否定的人物、物ごとの公式的スキームに反對するものを、ソヴェトの現實にとつて正しいものであると考える、というのが普通の答えであつた」と。

さらに、G・デニックによれば、「なによりも先ず、ロシア古典文學は、ソヴェトのひとびとにとって、なにか奇異な、理解しがたいものとは思われず、……それは有意味であり、重大な結果をはらんでいるということが、疑いなく證明されている。というのは、それが、革命後に生じた諸變化のゆえに、ア・プリオリには疑わしいものであつた連續性<sup>(ロシイイユイテ)</sup>の存在をあきらかにしているからである。……たしかに、多くのひとたちにとつては、革命前の小説を讀んだり、非ソヴェト的演劇を觀たりすることはまた、しばしのあいだ、ソヴェトの現實から逃避できるありがたい機會である。しかし、ソヴェト社會にもつとも廣く、かつ一貫した嗜好を明白に満足させている作品の人物というものは、それらの作品の大衆性が、彼らの情緒的訴え、いわゆる彼らの心理的・道德的風土といったものの魅力に、本源的に基づいているということを、證明している。……その證據は、『ブルジョワ・イデオロギーの殘存』は、ソヴェト・プロパガンダの發想ではなくて、プロパガンダが自認しているよりはるかに廣範なものであることをはつきりと確證している」<sup>(14)</sup>。

そもそも、内容分析はコミュニケーション内容を「丹念に單純化する手續き」<sup>(15)</sup>であり、非常に骨の折れるわりに、得るところが少ないといわれる。それは、一般的に、明白なものを確認するだけで、不必要にやつかり犠牲を拂うようと思われる<sup>(16)</sup>。そして、方法としては、ベレルソンのいうように、なにも魔術的性質をそなえたものではなく、當然のことではあるが、インプツ以上の中をそこから取りだすことはできないのである<sup>(17)</sup>。この點は、ライツの研究結果についても眞實である。したがつて、「おそらく本書に對する一番公平な判断は、それが廣々とした沙漠を横切つて途を開拓していくたのであるが、向う側に見出したものは、エデンの園に見劣りするものにすぎなかつた」というR・H・フィシアの批評は當つてゐる。

もちろん、内容分析によらなくては、ボリシェヴィキの行動の客観的記述は不可能である、といふのは言ひ過ぎである。やはりそれは、ボリシェヴィズムについての説明の特殊な型<sup>(18)</sup>でしかない。しかしわれわれは、ライツの内容分析によつて、ボリシェヴィキの行動の仕組みを客観的に把握することができる。彼は、ボリシェヴィズムに一定の構成を與えたわけであるが、この點に彼のすぐれた理解力が示されている、といふよう。なぜなら、内容分析に限らず、理解とは、所與の分析對象に對する構成力のことであるからである。ボリシェヴィズムの有り餘るコミュニケーション内容をただ漁り廻つたところで——“fishing expedition”——それからなにも捕捉することはできない。ライツの設定したカテゴリーは、現在もこれからも、ボリシェヴィズムのコミュニケーションの流れを、分析し組織化してゆく上に、きわめて有効であると思われる。

しかしながら、すでに述べたように、われわれは、ライツの構成をボリシェヴィキの事實的行動と比較し、その差異をあきらかにしなければならない<sup>(19)</sup>。言語的表現のユニフォーミティからして、いつても彼らの事實的行動もそうである、とするような保證はどこにもない。事實的行動の場合、それはたとえ本質的に同一であつても、現象的に異なるということ

は、實際には、曖昧にすまされる問題ではないであろう。したがつてまた、ライツの構成自體、ボリシェヴィキの抽象的な言語的記録からの抽出であるということ、その限りそれは、ひとつのモデル構成にすぎないとすることを、われわれは注意すべきである。それが確證されるためには、先の文學の場合にみたように、ボリシェヴィキの實際の行動の世界から、さもそのデータを收集してきて——現段階では、そのような試みは、いやじるしく困難であろうが——検證されなければならぬ。ライツ自身も、事實觀察——spectators, participant observers, interviewersによる——の必要性を認めているが、そうした結果から、ライツのモデルの再構成をおこない、それを一層妥當なものとし、かつ實用的なものとしなければならない。かくしてはじめて、それはボリシェヴィキの行動に、ある程度の豫測を與えないとも可能となる<sup>(28)</sup>。それに反して、このモデルに無暗と行動を押しつけ、各カテゴリーの機械的操縦をほいりやうでは、觀察者の明眸は、かえつて歪曲された形姿でしかボリシェヴィキをみぬことになつてしまふ。

(1) Carl J. Friedrich and Zbigniew K. Brzezinski, *Totalitarian Dictatorship and Autocracy*, Cambridge Mass., Harvard University Press, 1956, p. 75.

(2) Leites, op. cit., pp. 15-16.

(3) ライツは、本書において、レーニンのパーソナリティを究明しているわけではない。しかしながら、彼は多くの箇處において、レーニンのパーソナリティ特性の例を引照し、ボリシェヴィキの性格と關連づけている。たとえば、ボリシェヴィキが感じとつてゐる不安なり危険なりを、レーニン個人の、しさか神經症的不安感をほのめかす生活體驗によるものとしている。ヨーロッパのロンドンにおけるレーニンの思い出を記し(『追憶』下巻一一一三二頁)、

私が泊つてゐるホテルにやつて來たが、見ると心配そうに寝床にさわつてみている。  
「そりやなにをしておいでですか？」

「見てるんです——ノーッが濕つぼくはないか」  
私はすぐ解せなかつた。……すると、私の不審に氣づいて、説明した  
「あなたは自分の健康に氣をつけなければなりません」

（二）「……ヨーロッパの政治的生存の危機感を、ヨーロッパ自身の、あるべきインテリゲンチアの性格に還元する解釋は、しあしな極端な結果を招く恐れなし」が、重要な示唆に繋んでしめゆると思われる。筆者は、ヨーロッパのバーフナリティ形成、あるべきだ、シナト人の『國民性』によじて、psycho-cultural approach として、後の機會に持ちて發表する豫定である。

（4） Alfred Meyer, *Leninism*, Cambridge Mass., Harvard University Press, 1957, pp. 80-81.

（5） Daniel Bell, "Ten Theories in Search for Reality: the Prediction of Soviet Behavior in the Social Sciences" in *World Politics* Vol. X, No. 3, April 1958, pp. 343-344.

（6） 『脳漬的性格』は翻して曰く、ふくらめかでマニハイム、ナチズムの精神分析的研究によつて、すぐれた論文を發表してゐる。Paul Kecskemeti and Nathan Leites, "Some Psychological Hypotheses on Nazi Germany," *The Journal of Social Psychology*, Vol. XXVI (1947), pp. 141-183, Vol. XXVII (1948), pp. 31-117, pp. 241-270, Vol. XXVIII (1948), pp. 141-164.

（7） ヨーロッパ、ヨーロッパターマンが同じくらうな方法をもつて、煽動者の研究をしてゐるが、その精神分析的解釋は、あわめて成功した成果を收めてゐる。煽動のテーマは、その表面にあらわれた内容によつては理解できず、それらは一種の心理的言語を構成してゐる。したがつてやれども、心理的意味に移し變えることはむづかしい、首尾一貫した、社會的に重要な意味があつてゐると思われる。「煽動者は何者であるか、彼の、何が何であるかを知るために、われわれは彼についてこりて、意味の裏にまで廻つてみなければならぬ。……心理的な内容に翻譯するにはなし」と、煽動のテーマを理解することは不可能である」、ヨーロッパターマン、辻村明譲『煽動の技術——欺瞞の豫言者』（一一八頁）からだある。

（8） Bell, loc. cit., p. 341.

（9） John S. Resheter Jr., *Problems of Analysing and Predicting Soviet Behavior*, p. 9.

（10） Ibid., p. 52.

（11） Ernest Simmons, (ed.) *Through the Glass of Soviet Literature: Views of Russian Society*, New York, Columbia University Press, 1953, Introduction, p. 23.

（12） Ibid., p. 10.

（13） Ernest Simmons, (ed.) *Continuity and Change in Russian and Soviet Thought*, Cambridge Mass., Harvard University Press, 1955, Part V, Review, pp. 463-464.

（14） Quoted by Simmons, Ibid., pp. 467-468.

- (15) Harold Lasswell, Daniel Lerner and Ithiel de Sola Pool, *The Comparative Study of Symbols: An Introduction*, Stanford, Stanford University Press, 1952, p. 52.
- (16) Arnold Brecht, *Political Theory: The Foundations of Twentieth-Century Political Thought*, Princeton, Princeton University Press, 1959, p. 45.
- (17) Bernard Berelson, *Content Analysis in Communication Research*, p. 198.
- (18) Book Review by Raymond H. Fischer, *American Historical Review*, Vol. LX, No. 1, October 1954, p. 109.

(19) ジュラシ、ハイハのモデル構成に多くの示唆を貢献し、共産主義者のオペレーション・モデルを構成して、G.トーヤン等の研究 (Gabriel Almond, *The Appeals of Communism*, Princeton, Princeton University Press, 1954, p. 8, note 1.) が、きわめてすぐれた成果をもたらす。本書の内容はいにしへ、筆者は『法學研究』第三十一卷第一・三合併號 (一九五九年一月) の資料欄に紹介しておこしたや、詳しく述べそれを参照されたら、簡単に記しておくる。著者は、先ず共産主義の古典文獻を内容分析して、共産黨および黨員に關するテーマの量的頻度をかぞえ、共産主義者のモデルを設定する。そしてついに、前黨員のインター・ビューによつてえた資料をもととし、モデルと現實との差異をあきらかにしていく。かくてわれわれは、そのモデルの有効性と『作用している現實』とが、経験的研究によつて確認されていけるのをみる。これが、

(20) その成果のまじめでないが、ヘルによれば、ハイハの *The Operational Code of Politburo* —— これは、『ボリュームの研究』のカテーテリーの部分を要約的にあらわしたものである —— は、朝鮮動亂の休戦協定に際して、アメリカ側の交渉者によつて、實際上、*tactical manual* として使用されたところ (Bell, loc. cit., p. 339.)。